

- 長沢宏昌 1985 「平安時代・中世・近世」 「まとめ」 『笠木地蔵遺跡』 山梨県教育委員会
服部実喜 1984 「調査の成果と問題点、中世」 『蔵屋敷遺跡』 鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会
服部実喜 1984 「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年の位置づけについて」 『神奈川県考古第19号』 神奈川考古同人会

第2節 磯並神社と祭式

磯並社は諏訪神社上社の攝末社とされているが、磯並社は諏訪上社の「上十三所」のなかの一つである。上十三所名帳(信濃史料第八巻元正元年十一月)をみると、すでにこのころ、本地垂迹説が採りこまれ、本地仏が定められている。しかしそれより以前から存在したと考えられている神であるが、祭神については判っていない。地元の研究者は、在地の神であるとみている人が多い。上十三所の外に、中十三所と下十三所名帳があるが、ここでは省略しておく。

上十三所名帳によると、大祝居館である前宮所在地の小町屋地籍に6社、守矢神長官屋敷所在地の高部地籍に4社。そのほかは前宮から離れて、大歳社が茅野(駅前)、千野河社が西茅野。楠(葛)井社が上原地籍である。

磯並社は高部地籍にあるが、高部には玉尾社、穂^{たまた}護^{ほまた}(股)社、瀬^せ社があつて、磯並社をとりまくように位置している。磯並社は磯並社大明神ともいわれ、本地仏は千手観音とされている。

磯並社は玉尾、穂股、瀬の各社に比較すると、10倍も大きい石祠が建立されているが、石祠の西背後は斜角50度くらいの急山腹になっていて、そこを約50m登ると、玉尾、穂股、瀬の三社が点在しており、さらに尾根筋の西側に小袋石、あるいは舟^{つなぎ}繫石と呼ばれる三角錐をした巨岩が屹立している。小袋石の位置からみると、ほぼ真東に磯並社があることになる。

磯並社が史料に現れるのは、嘉禎4年(1238)の「諏訪上社物忌令」に、十三所名帳がみられる。では磯並社はどんな役割をしたのか、文献からうかがってみよう。

大祝即位と十三所社参 諏訪上社の大祝は、代替りして位につくことを「位付」、「位次」、「位立」、「位ニ即ク」と書き、「職位^{しよくい}」または「即位^{そくい}」と呼んでいる。大祝の即位の原初的な姿は、大祝有員のときに添書にみられるが、山鳩色の袍衣をぬぎ着せ、「祝ハ神明ノ垂迹ノ初メ御衣ヲ八歳ノ童男ニヌキキセ給テ、大祝ト称シ、我ニ於テ体ナシ、祝ヲ以テ体トス」と述べて、いらい守矢神長家が、即位の秘法を伝えその任に当たってきた。大祝即位の記録は守矢家に伝わり「大祝職位事書(諏訪史料叢書八)」としてまとめられている。

即位についての文献の古い方は、貞応2年(1223)の「諏訪信時、諏訪社上社大祝ノ位ニ即ク。貞応2年12月13日 大祝立給信時畠 即位法 奉授神長頼実神事例式。(信州諏訪詞文書)」がみられる。また暦仁元年(1238)「諏訪信重諏訪社上社ノ大祝ノ位ニ即ク。大祝立給信重畠即位秘法奉授神長政真大祝職位事書、(諏訪史料叢書八)」などからうかがうに、大祝即位のさい神長からの即位秘法と、また即位神事がすでに例式化していたことが判る。

即位の神事を応永4年(1397)「諏訪有繼諏訪社上社大祝ノ位ニ即ク」の例をみよう。

神殿の格の下に鶏冠社があり、社前の石上にて大祝即位の儀式が、神長の主導により行われる。大宮(上社本宮)に御参りをし、御宮(前宮)に参る。御宝殿(内御魂殿)を称宜に開けさせ七度拝礼し、のち御門戸屋にて神事、のち大祝は神前に例の如く詣でる。これがすむと小宮巡りがある。若御子(若宮)・磯並・玉尾・穂俣(股)・瀬大明神・所政殿・荒玉とまわるが、これが十三所行事である。そして下道より大御門戸にきて、乱ちょう(鉦や鼓と喚声)にはやされ、神殿のまわりを三まわり(御手祓道を三廻する事)して後、内御玉殿にて申立をする。我身は次の大明神の御正体になったとして、清器の儀を行い、酒宴がある。そのあと溝上・前宮・久須井(葛井)・大歳・千野河に御詣りがある。大祝信有の嫡子有繼9歳のとき位についた記録である。

時代が下って文明年間(1484)の二つの記録により大祝即位の概要「大祝職位事書(諏訪史料叢書八)」をみると、大体同じであるが、文明17年の記録には、「下宮御参候」とあるのが異なるだけで、また前に記した応永4年の即位の儀式と、十三所御社参はほとんど同様であるから大祝即位の儀式・神事が成立していらい、強固な伝統を保ってきたことがうかがえる。

大祝即位における十三所社参のうち、磯並社の神事について『大祝職位事書』によってみると、「大祝殿に神長御幣、御手楽をもたせ、神長十三所御即位法授職大法申(文明16年)」とあって、大祝即位のさいの磯並社の神事は、主として御幣、御手楽、大法にあるから、道具の使用は少なかったとみられる。

	上	十	三	所
	神 社 名			所 在 地
一 番	所 大 明 神	阿 弥 陀 女 神		小 町 屋 前 宮
二 "	前 宮 大 明 神	如 意 輪 観 音		"
三 "	磯 並 大 明 神	千 手 観 音		高 部
四 "	大 歳 大 明 神	地 歳 菩 薩		茅 野 町
五 "	荒 玉 大 明 神	弁 財 天		小 町 屋
六 "	千 野 河 大 明 神 (亀 石 明 神)	文 殊		西 茅 野
七 "	相 手 大 明 神	虚 空 蔵		小 町 屋 前 宮
八 "	若 御 子 大 明 神	勝 軍		"
九 "	楠 井 大 明 神	薬 師 女 神		上 原
十 "	溝 上 大 明 神	聖 観 音		小 町 屋 前 宮
十一 "	瀬 大 明 神	弥 勒		高 部
十二 "	玉 尾 大 明 神	愛 染 女 神		"
十三 "	穂 護 大 明 神	釈 迦 如 来		"

上社春祭りと**冬祭り** 磯並社の毎年行われる祭りは、上社春祭と冬祭のさい、磯並神事として取り行われている。『諏訪大明神絵詞』(神長本)によると、春祭りは「三月一禩 十三ヶ日神事

相続ス」とあって、この祭りを諏訪社上社の最大の祭りとし、「一の祭り」とされ「御頭祭」とも、また酉の日に行われる内^{うちあがた}県・大^{おあがたおおみ たてまし}県 大御立座神事から、「酉^{とり}の祭り」「御頭祭」とも呼ばれてきた。

春祭りは三月初午の日（午の日が3回あるときは、中の午の日）から始まるが、中世の例をみてみよう。初午の日には、外県大御立座神事（ほぼ上伊那地方）のため、童男が神使いとして定められ、御杖^{つえはしら}柱・大鈴（鉄鐸）を持って、前宮での神事のあと出立し、その夜「平出泊」（辰野町平出）となり、7泊6日の廻神と称される神事に従う。「一の祭り」最大神事は、「酉の日」に行く。内県（茅野市内の一部）と、大県（諏訪盆地東北部）大御立座神事が前宮神殿を中心に行われている。その盛儀のありさまは、『絵詞』に詳細に記述されている。13日間の一連の春祭りの最後は、午の日に磯並神事が行われる。

春祭りの磯並神事は『絵詞』によると、「彼社ノ拝殿ニシテ饗膳如常。歩射廿番、切的ヲ用ル、帰路ニ草花ヲ結ヒテカツラトシテ、人コトニ類ニカケテ家ニカヘル」とある。また、宮地直一博士は、「先ヅ磯並社ノ拝殿ニ饗膳アリ、其ノ儀常ノ如シ、（次ニ山神・小袋石ニ御手幣・御酒・御餐・

月 日	神 事	廻 湛 神 事		
		外 県 神 使	内 県 神 使	大 県 神 使
3 月 午 日	外 県 御 立 座 神 事	平 出 泊		
未 日	一 之 祭 所 政 殿 神 事	小 河 内 泊		
申 日	擬 祝 家 人 家 の 神 事	真 木 泊		
酉 日	内 県 ・ 大 県 御 立 座 神 事	伊 奈 部 泊	千 野 泊	上 原 泊
戌 日	内 県 宮 付 御 頭	御 藺 泊	古 田 泊	下 桑 原 泊
亥 日	大 県 介 御 頭	前 淵 泊	矢 崎 泊	友 之 町 泊
子 日	権 祝 殿 御 神 事	沢 底 泊	栗 林 泊	小 井 河 泊
丑 日	前 宮 御 神 事	帰 着	帰 着	真 志 野 泊
寅 日	国 祭			帰 着
卯 日	祝 日 御 頭			
辰 日	禰 宜 家 人 家 の 神 事、野 炎 神 事			
巳 日	新 申 シ、副 祝 殿 御 神 事			
午 日	磯 並 御 神 事			

御穀・瓶子等各一前ヲ尊ス） 次ニ廿番ノ歩射ヲ行ウ 其儀切的ヲ用キル（帰路人毎ニ草花ヲ結ビテ髪^{かつら}トナシ之ヲ掛ク）」（『諏訪史2巻後』）とある。これによると磯並社の拝殿において、前例通りの酒食の宴が行われ、歩射つまり歩いて的を射る競技が行われた。祭りは旧暦3月で今の4月にあたり、祭りが終わると参詣の人たちは下馬沢川、御手洗川の川辺に咲く春の野の草花、ふきんとう、たんぽぽなどを編んで髪に飾ったり、首にかけて、春を寿ぎながら帰って行く。磯並社の神事の費用は、「神田八反を当られた。但し永録下知状には竹居庄に領田五段をもって勤め」（『諏訪史2巻後』）とあるから、盛大に行われたとみられる。したがって磯並社春祭りにおいては、酒・御穀・

肴などが容器に盛られ、前宮における御頭祭のようにかわらけも沢山用意されたものとみられる。

12月22日より冬の大祭が、8日間にわたって続く。これは上社春祭りと対応するものである。

12月22日	一之御祭所政殿神事
23日	擬祝殿神事
24日	大海祭
25日	むさでの神事
26日	禰宜殿神事
27日	副祝殿神事
28日	磯並御神事

これを『絵詞』でみると、「一ノ御祭は大祝以下の神官、所政戸社ニマウツ、行列例ノ如シ、饗膳ノ儀又常ノ如シ、同日御室入。大穴ヲ掘テ、其内ニ柱ヲ立テ、棟ヲ高メ萱ヲ高テ、軒ノタル木土ヲササエタリ。今日第一ノ御体ヲ入奉ル」とあって、御室入神事がはじまる。その後一連の神秘的な神事がつづき、28日は磯並神事が行われる。『絵詞』には「瓶子調べ。神官氏人乱舞興宴アリ。」とあって、宮地博士は「旧記によるに、之を春季の例により、同様饗膳の後、山神・小袋石にも奉幣する。」（『諏訪史2巻後』）と述べ、磯並社における神事に引きつづき、御室の行事として瓶子そろへ、神官・氏子乱舞すると述べている。冬祭りの磯並社祭が春祭りと同様とすると、酒・御穀・御贄を奉げ、相嘗のためのかわらけも用意されたとみられる。

上社花会 「花会」の記録の出てくるのは、13世紀末からで、「諏訪社上社 高井郡中村郷並ニ井上郷ヲシテ 本年花会御堂頭番役ヲ勤仕セシム」（『守矢文書』応年4年）とみられる。また『絵詞』の諏訪祭春上2月15日には、「下宮・神宮寺ニシテ 常楽会舞楽アリ。釈尊涅槃ノ令節ヲ迎へテ神明結縁ノ大会ヲ行フ。四月十八日ハ、上宮ニシテ花ノ会アリ」とあって、上社において花会の行われていたことが判る。

花会とは釈迦誕生を祝う祭りで4月8日に行われており、降誕会、灌仏会、仏生会、龍華会とも呼ばれており、日本では季節的に花祭りとして喜ばれ、東南アジア各地にも広範に親しまれた祭りである。一方下社の常楽会は、釈迦入滅の日として涅槃会とも呼ばれる祭りで、諏訪神社上下社が神仏混淆になって、「両社相對シテ如来設化ノ始終ヲツカサドル」（『絵詞』）とされるようになってきている。

上社で行われた花会の次第は、4月7日大宮（本宮）花会があり、これに当る頭役は宮舞頭である。宮地博士によると、大祝以下神官・社僧・氏子の多数が着座、饗膳、引物の分配の後、頭人が金・銀・絹布・白紙等を神前に捧げるとある。楼門前の廊下においては、「都鄙令人会合ス」と表現されたように、都の舞人、楽師の来社もあって、舞踊、楽隊演奏に盛大な人気があったようである。

翌8日は神宮寺花会として、役には御堂舞頭があたるが、御堂舞頭とは花祭りの主役である、釈迦を入れる花で飾った花御堂を経営するを主としたのであろう。宮地博士の記述をみると、堂

前中央に高座2台を置き、講師と問者の席とされて、法花講論を行う。大祝以下神宮・両頭らも参会して廊に座す。講論が終わると氏子、子供らは花箱をもち、楽隊がつき大行進を行う。この祭りは諏訪人にとっては上社の見なれた、武術・犬追物・相撲などの武骨な祭りとなり、花の行列、舞楽の演奏、酒と菜魚の酒宴が終日はなやかにつづく楽しい春の祭りであった。つづいて9日は磯並神事が行われ、頭役は磯並頭があたる。この日は前宮神事も行われるが、これは前日に引きつづき前宮、磯並社において、舞楽御頭の役により、正式な舞楽、御児之舞を奏するが、例外として巫女の舞も行われた。磯並社においては饗膳が行われ猪・鹿を供えたとある。

華やかな一連の上社花会もその終宴は、磯並社に参って行すが、神宮寺花会の饗膳には菜魚とあるのに、磯並社では獣であって何となく、華やかさと田舎臭さの対比がうかがえる。この磯並社の饗膳にさいしても、当然、饗膳の席と酒食の用器が揃えられたであろう。

磯並社の境内 磯並社の境内の様子については、大祝即位式の十三所社参の記録からうかがうと、磯並—(小袋石)—玉尾—穂股—瀬社とめぐるが、現在の配置は発掘された、基壇状遺構1の西上の平坦面ほぼ中央に磯並社の石祠がある。この磯並社を中心にして、磯並社と小袋石の中間の斜面を僅かに削平し、北側に小石祠一基、南側に小石祠二基がみられる。昭和55年代までは各小石祠に社名札がつけられていたが、今日は失われているので、ここでは決定しないでおく。

上社関係の絵図でよく知られているのは、天正の絵図といわれるごんのほうり権祝矢島家蔵の絵図があるが、今回は現認できなかった。また「天正のぼろぼろ絵図(伝天正)」と称される神宮寺区蔵の絵図は、写真で『諏訪史2巻後』に載っているし、現認したこともある。さらに上社本宮にも絵図一幅がある。この3枚の絵図の相対的時系列的関係は、権祝家蔵絵図を神宮寺区蔵絵図が写したものとされている。上社蔵絵図も権祝家あるいは神宮寺区蔵絵図の模写だろうといわれている。

絵図の製作年代を天正と伝えているが、神宮寺区蔵絵図、上社蔵絵図とも、権祝家絵図を忠実に模写したものとすると、いずれも天正年間以降の製作とみられる。その主たる根拠は神宮寺宮田渡に、宮川の川筋に囲まれて大祝家が画かれていることから、江戸時代初期つまり、大祝家が前宮から宮田渡に移転以降の製作かと思われる。

神宮寺区蔵絵図によって、磯並社の配置をみると、最上段に小袋石。中段には右(北)から瀬大明神(2間×1間)。次に磯並(2間×3間。2間×2間の2棟)。次に日月神(1間×1間)。次に玉尾明神(3間×2間)。最左端に穂股明神として鳥居だけがみえる。下段とみられる位置には上手に五間廊名の1棟、その左に1棟(帝屋とする説あり)あって、下方にはもっとも大きい寄棟の建物(2間×4間)が舞台と記名され画かれている。しかしその絵の下には「今ナシ」の注がある。舞台の左側稍下方に、寄棟(2間×1間)神事屋と記名された1棟もあるが、これも「今ナシ」の注記がある。

上社絵図は見取図であるから、正確な位置は望むべくもない。しかし「大祝職位事書」あるいは「春祭り」「冬祭り」そして「上社花会」をみると、神事、饗膳が行われているから、それに使用さるべき建物が必要である。磯並社、玉尾社、穂股社、瀬社について画かれている建物は、現

存する石祠の上覆屋であったのか、建築物が老朽化して再建されずに石祠に替えたのか、の二通りの考え方が出来る。一方、神事、饗膳に必要な建物としては、下段に位置している。舞台、神事屋は寄棟造りの比較的大形建築物として画かされている。

磯並社の建物を建築させた記録としては、大永4年(1524)「諏訪社上社 同社磯並社宝殿及び前宮三之御柱造営料ヲ伊那郡監田殿ニ徴ス」(「御造営日記写」)とあるように、頭役の造営あるいは造営料として徴収し、建築がなされていたものとみられる。

上社の春祭りと花会の記録は、14世紀末から15世紀中頃まで頻繁に出て来る。春祭りの成立期については、上社最大の祭り「一禊(祀)の祭り」と同時とみられるが、上社の経済的基盤を支える「大御立座神事」が中心になっている。したがってこの祭りの最終日に行う磯並神事も、「一禊の祭り」の発生、成立と無関係ではない。この祭りの成立時期は決めがたいが、しかし水稻農耕地帯を神事巡行(廻神)することからみて、水稻農耕の祭祀の完成期に成立したものと想定したい。一方花会の行われた時期については、もっとも記録が多いのは15世紀中頃であるが、すでに完成されていた行事のようである。伊藤富雄説を宮地博士は紹介して自説を述べているが、「伊藤氏は絵詞以前の古文獻に一切所見を欠く点に立脚し、北条氏滅亡の直前か、足利氏の初項(注1333年頃)をもって創始期と推定されている。(中略)その起源が平安盛世期を遡らないだけは確實」(『諏訪史2巻後』)と述べている。

諏訪社に仏教が取りこまれた時期は、容易に決めがたい。しかし仏寺、堂塔が建立された時期というのは、確実に神仏混淆に入った時期として問題はないと思われる。したがって、諏訪社上社に堂塔、仏像を寄進した記録をもってこれにあててみたい。

正応6年(1293)下伊那の豪族、知久敦幸は諏訪社上社に普賢堂を建立(「諏訪市史年表」)。永年2年(1294)僧観海諏訪社上社神宮寺ノ釈迦三尊像ヲ建立シ、是日、供養ヲ行フ(「諏訪史料叢書二十九」)。永仁5年(1297)知久敦幸 諏訪社上社神宮寺ニ銅鐘ヲ寄進ス(「諏訪史料叢書二十九」)。延慶元年(1308) 是日 諏訪上社神宮寺五重塔露盤成ル(「諏訪教育会蔵」) 以上の記録からすると、13世紀末に諏訪社上社に仏教関係の収録が集中しており、また下社においても大祝金刺満貞が正安2年(1300)に鎌倉建長寺住持、一山一寧を講じて慈雲寺を開創している。このことから上社・下社とも13世紀末にいたり、長く拒否してきた仏教を公認したものとみられる。

14世紀末頃から記録にあらわれる、大祝即位式に十三所社参・花祭り、花会は、多くの場合、「例の如く」とあって、この当時すでに例式化していたものとみられるから、これらの神事、行事はさかのぼって開始されていたものとみられる。したがって上社の仏教関係の行事のはじまりは、13世紀前半頃に想定されよう。磯並社における神事もこの時期に行われた可能性が強いとみられる。